

メソポタミア先史建築の発展過程 宮殿建築を中心としての試論

The development process of Mesopotamia prehistoric architecture Essay on palace building

○松枝大貴¹, 重枝豊²*Daiki MATSUE¹, Yutaka SHIGEEDA²

Mesopotamia excavation survey and analysis by archeology were started in the early 1900's, but architectural history analysis is still inadequate. Especially in the past 40 years no major theoretical renewal and reanalysis have been conducted, only the accumulation of excavation data is advanced. This paper aims at updating these theories. Especially the palace remains is less noticed than the temple remains, the theoretical formation is also slow compared to the temple. Now that the number of materials has been gathered, I believe that theoretical renewal of the palace remains is worthwhile. Therefore, this paper attempts reexamination by additionally choosing theory and choosing theory from the past thesis mainly on the palace remains.

1. はじめに

現在、西洋建築史における先史建築の扱われ方は西洋建築図集や建築学体系で示されるように、1960年代から大きな変化は見られない。数多くの遺構の発掘や調査が考古学研究者によって進んでいるが、建築史の研究の多くが近年の発掘成果を参照していないことが原因として挙げられる。既往研究として1959年に小林文次^[1]によって著された「建築の誕生」^[2]がある。この論考では先史建築の建築的研究の余地を示したが、英語で出版されなかったことも起因し、広くは認知されなかった。小林が示唆した研究の可能性と問題は現在も解決に至っていない。本稿では小林が示唆した可能性に対し後世の研究を用いながら神殿と比べ比較的次数の少ない宮殿遺構を中心に考察したい。また、現在先史における建築の内容を牽引しているのは考古学ということを見みると今後の建築史学が先史時代の建築にどのように関与するかも問題となる。このような状況で建築学的にこれらの遺構について研究を進めるかという点について分析する。

2. 現状の背景

小林は「文明の誕生」の項で住宅・神殿・宮殿・都邑の四つに体系しメソポタミアの建築について総合的な試論を展開している。住宅・神殿・宮殿の発展過程を農業の発展と社会形成と絡め、そのうえで平面解析を行い居室の役割の算定を行っている。

論考発表時の手に入った調査報告書を多数参照しており、1960年代手前までのメソポタミア先史建築の総合的な論考とみなしてよい。当時は神殿遺構を主軸に発掘が行われ、宮殿遺構に注目が集まったのはこのこ

ろからである。小林の論考中では宮殿についての考察は当時発見されていた大規模な遺跡であるマリ遺跡及びヌジ遺跡を中心に展開されている。宮殿遺構の主な特徴は平面上に散在する大空間を部屋とするのか中庭とするのが注目とされる。中庭であるのであれば中庭を中心に機能的室群が存在していることが想定され、宮殿発達の上で平面構成の複雑化の過程が明らかになると考えられる。しかし小林は平面構成の複雑化を示唆はしながらも、空間のспан分析^[3]による室内空間なのか否かに着眼している。この点については当時の資料数を鑑みると再考の余地があるが、今回は小林のспан分析を採用したうえで分析を加えていく。

3. 分析の歴史

前述したようにメソポタミア建築の分析はギリシャ・ローマのような立面分析は行われていない。メソポタミア建築はギリシャ・ローマのように上部構造が残っている遺構が圧倒的に少なく、基本的に壁体は高く成人男性の腰の高さにとどまり、通常は基礎部分のみが出土している。このような背景から平面分析が主流になされ、本格的な平面分析の論考が始められたのはバビロン遺跡を発掘した考古学者 Robert Koldewey^[4] (以降コルデヴァイ) である。コルデヴァイはバビロン遺跡の出土遺構を用いて平面構成を「命令型」と「接続型」の2種類に分類することとどまった。単一遺構において分析するには資料数不足であっただけでなく建築遺構が考古学における興味の対象でなかったことも起因している。その後コルデヴァイの分析方法を多くの研究者が引用・発展させ、Muayad Said Basim Damerji^[5] (以降ダメルジ) が論考「メソポタミ

1 : 日大理工・院 (前)・建築 2 : 日大理工・教員・建築

ア建築序説」^[6]において一定の成果にまとめた。

ダメルジは室の使われ方に大きな興味を示さず、室のつながれ方、特に門と扉の存在について考察している。ダメルジの分析は平面分析^[6]のみで建築体系を考えるうえでは不十分な点が多い。特に前章にも挙げた中庭の存在を壁体によって囲まれた室として考えており、宮殿の発展過程を考察するうえでは再考の余地が残っている。

小林は室のスパン分析^[7]で中庭空間と室内空間の差別化を図り、調査報告書においても「玉座の間」と考えられると空間に対しても分析結果から断定を行って宮殿構成について展開していることは大きく評価できる。一定のルールを作成するうえで建築的手法を用いることは今後も必要であるとする。

小林・ダメルジ両者とも発展過程を考えるうえでは参考にすべき論考ではあり、小林の論考からはスパン分析を用いた中の算定について、ダメルジの論考からは平面分析を引用し分析を行う。

4.分析

分析は宮殿されている資料を用いる。分析方法としてはスパン分析、ダメルジによる平面分析それらに加え部屋の接続数を加味し考察する。また分析年代を青銅器時代とする。それ以前の資料は宮殿の存在が曖昧で大邸宅と付属しておりかつ、政治の中心が神殿と共存していた時代であるために考察が難しい。青銅器時代に絞ることで時代間の差異ではなく発展過程を考察することが可能であるとする。アッシュール遺跡のエシュヌナのみが同一地域での発展過程を見ること

表 1 メソポタミア青銅器時代遺跡一覧

時代	No.	遺跡・遺構	主要報告書・著者
初期王朝時代	1	エリドゥ	SAFAR 1950
	2	ララク	M ADHLOOM 1960
	3	キシユ	LANGDON 1924
アッカド時代	4	テルブラク	M ALLOW AN 1947
ウル第三王朝時代	5	ウル	W OOLEY 1923
古バビロニア時代	6	エシュヌナ (シュイリヤ期)	FRANKFORT, JACOBSEN and PREUBER 1932
	7	エシュヌナ (ピラマ期)	
	8	エシュヌナ (イバルベル1世イビクアダ2世紀)	
	9	アッシュール (古宮殿: シヤムシアダド1世期)	PREUBER 1955
	10	マリ	PARROT 1958
カッシート・ミタンニ時代	11	カラナ	OATES 1966
	12	ドゥル・クリガルズ	BAQR 1945
	13	ヌジ	STARR 1939
	14	アッシュール (アダドニラリ1世期)	PREUBER 1955
宮殿としての性格が不明の建築遺構	①	シャリフ・ハーン	LAYARD 1853
	②	アダブ	BANKS 1912
	③	ジェムズデッド・ナスル	LANGDON 1928
	④	ラルサ	PARROT 1933
	⑤	バクル・アワ	

「メソポタミア建築序章」及び「エジプト・メソポタミア建築」参考。松枝作成

が可能ではあるが他遺跡と比較できないため、今回は同一遺跡であっても他遺跡と同様に扱い分析する。

表 2 メソポタミア青銅器時代宮殿遺構における室連結数

	遺構 No.	1 部屋	2 部屋	3 部屋	4 部屋	5 部屋	6 部屋	7 部屋	8 部屋以上
初期王朝時代 (アッカド時代)	1	○	○	○	○	△	△		
	2	○	○	○	○				
	3	○	○	○	○		△		
ウル第三王朝時代	5	○	○	○	○	△	△		
古バビロニア時代	6	○	○	○	○	△	△		
	7	○	○	○	○	△	△		
	8	○	○	○	○	△	△	●	
	10	○	○	○	○	△	△	●	●
カッシート・ミタンニ時代	12	○	○	○	○			●	
	13	○	○	○	○	△	△		●
	14	○	○	○	○	△	△	●	●

各報告書掲載図面より分析

○：遺構に多く散在する △：遺構中の大型の室にみられて数が比較的少ない ●：スパン分析で中庭と算定されたもの。

5.分析結果

分析結果として中庭の有無に限らず4つの空間の連結、つまり四辺形の部屋を基本とする部屋形状に対して四辺を部屋と連結をしている遺構は、初期王朝時代から存在している。一辺に2つ以上の空間が連結したものは数が少ないが、各年代に6部屋連結までは存在している。小林のスパン分析で中庭と算定されたものは、7部屋以上連結されておりかつ古代バビロニア時代以降にしかその部屋空間は存在していない。このことから古代バビロニア以降室の使われ方、造営の仕方に大きな意図をもち変化していったことが考えられる。

6.まとめ

今回はダメルジの空間分析と小林のスパン分析を統合させて考察を行ったが、建築的要素を分析に加味することの可能性を示すことができた。今後はこれらの要素に壁体の厚み、室面積やそれらの組み合わせも含め分析を加えることでの発展過程を概観することが可能かと考える。

参考文献・注釈

- [1] 小林文次 日本大学理工学部建築学科教授 [2] 文明の誕生 小林文次 1959/11/15 相模書房 [3] スパン分析：壁体で囲まれた空間に架構がかかっていたのかを分析するうえで仮に架構を想定した場合のスパンの長さを基準に実際に天井がはれていたのかどうかを検証し中庭空間を算定している。 [4] Robert Koldewey ドイツ人考古学者。バビロンの発掘隊長を歴任し、調査報告書内で分類形の論考を発表。 [5] Muayad Said Basim Damerji イラク文化庁長官 各発掘現場の隊長を歴任 [6] メソポタミア建築序章- 門と扉の建築術- Muayad Said Basim Damerji 1987/11/3 国士舘大学イラク古代文化研究所 [7] 平面分析：室結合を集合型・接続型・命令形・中庭住宅・三分形のパターン分けを行い接続の仕方をどの辺をどのようにつなげているかを分析している。そのうえで連鎖的に接続しているのか大空間を中心なのかを分析している。